自閉症スペクトラムの子どもの初期言語と遊びの発達

榊原弘子[1)]・小山　正[2)]

Early Language Acquisition and Development of Play in the Children with Autistic Spectrum

Hiroko Sakakibara and Tadashi Koyama

キーワード：自閉症スペクトラム，言語獲得，象徴遊び，前言語期からの発達支援，発達スタイル

Ⅰ．本研究の目的

自閉症は，児童精神科医であるKanner(1943)によって「情緒的交流の自閉的障害」という論文の中で11例が報告された。Kannerが報告したこの幼児自閉症は，精神分裂病の早期発症型と考えられた。1970年代に入り，Rutterら (1968) によって「言語認知障害説」が発表されることで，自閉症研究は大きな転換点を迎える（小澤, 1984)。言語認知の障害を自閉症の一次的障害とみなし，言語認知の障害が二次的に社会的コミュニケーションの障害をもたらす特異な障害であるという，「言語認知障害説」をRutterらは提示したのである。

自閉症の主要な症状については基本的にKannerとRutterは一致しているといわれる。しかし，Kannerが対人的引きこもりのゆえに言語認知の障害が二次的に派生すると考えるのに反し，Rutterは言語認知の障害ゆえに対人関係障害が二次的に引き起こされると考える点で，異なる見解であったと考えられる (山上1999)。

その後，1980年代に入って，自閉症の症状はすべて認知・言語の障害によって説明しえないということから，Baron‐Cohenら（1985) による「心の理論」（Theory of Mind）の観点から自閉症の認知的障害に関する研究が一気に進められた。

Baron‐Cohen (1995) は「心の理論に注目し，自閉症の子どもが，他者の心的状態を推測できない，つまり他者の心を理解することが苦手であることを指摘した。

自閉症は，国際的な疾病分類であるICD－10やDSM－Ⅳでは「広汎性発達障害」(Pervasive Developmental Disorderes) の中に位置づけられているが，イギリスでは，ほとんどの親が広汎性発達障害という用語を嫌い，混乱をまねくものだとしていて，Wing, L. (1996) は，近年，「自閉症スペクトラム (The Autistic Spectrum)」という概念を用いている。これは自閉症の症状の幅広さを捉えるための概念ともいえる。自閉症スペクトラム障害の中に位置するそれぞれのサブグループについては，様々な特徴の組み合わせによって自閉症の臨床像がみられるのであるが，そこに境界線を引くことは困難であってほとんど意味のないことである。そうしたことからも，自閉症スペクトラムという幅広い概念の中で子どもたちをみて，個々それぞれの能力のパターンを見極めることが必要である。

1）愛知県立安城養護学校（平成15年３月，岐阜大学特殊教育特別専攻科修了）
2）岐阜大学教育学部障害児教育実践センター

いずれにしても自閉症スペクトラムへの早期対応においては，他者の意図や他者認識の発達を考えていくことが課題であるといえる。

自閉症の中核的な障害は言語コミュニケーションの発達にある。そこには，「心の理論」における発達や他者認識の発達が密接に関係している。その特徴は，前言語期からみられ，前言語的コミュニケーション行動における原叙述的行為の発達に時間を要することが指摘されている (Curcio,1978)。その問題が，その後の自閉症児の言語・コミュニケーション行動の発達に引き続き影響を与えてくる。この問題について，前言語期から基本的な信頼感の形成を核にし，遊びやその中での他者認識の発達を考えることが，原叙述的な行為の発達につながることが指摘されてきている (小山, 2000)。

一方，自閉症幼児の言語発達はいうまでもなく，語彙や構音の獲得は，ダウン症の子どもたちなどに比べて損なわれていないといわれている (Tager‐Flusberg, 1999)。しかし，初期の語彙獲得については小椋（1999）などの報告があるが，語彙内容と他者認識の発達についての検討は十分にされていない。健常児の初期語彙獲得の方向性をみると，子どもの日常生活経験や他者認識の発達が反映されている。そこには，個人差・発達スタイルが当然みられてくる。

この時期には，遊びが著しく発達する。遊びの中での認知発達と言語発達との関連性についてはこれまでの研究で指摘されてきている (小椋, 1999; 小山2000)。筆者自身も，自閉症の子どもたちの発達支援に関わる中で，そのことを確認している。遊びの中で，他者の意図理解や他者認識が生じてくる。また，小山も指摘しているように，表象の発達が他者との遊びの中でみられ，それによって言語発達が進歩する。

そこで本研究では，基本的信頼感が形成され，１語発話期から多語発話期にある自閉症スペクトラムの子ども３例を対象として彼らへの発達支援の場面での遊びの発達においてみられる他者認識や表象の発達と言語発達，特に語彙獲得の方向性との関連性について検討を加えることを目的とする。

Ⅱ．研究方法

１．対象

本研究の目的から，岐阜大学教育学部障害児教育実践センターの小山研究室で発達相談を受ける自閉症スペクトラムの子ども３例を対象とした。

＜事例A＞

生活年齢５歳４か月。男児。第２子。自閉症，中度の知的障害。独歩，生後11か月。初語，１歳６か月。指差し，４歳０か月。4歳から保育所通所。病歴・医療歴，特になし。Kセンターにおいて，３歳の時に自閉症と診断される。４歳６か月から主訴，ことばの遅れの主訴のもとに当センターにて発達支援を開始する。

＜事例B＞

生活年齢６歳３か月。男児。第１子。自閉症，軽度の知的障害。独歩，生後11か月。指差し，３歳０か月。初語，３歳３か月。病歴は，３歳４か月の時に，肺炎にかかる。その他はなし。３歳からH病院で，言語訓練を受け始めるが中断。３歳から，地域の母子通園施設に通所。４歳から保育所通所。Oセンターにて，３歳の時に診断される。３歳10か月から主訴，ことばの遅れにて当センターにて発達支援を開始する。

＜事例C＞

生活年齢７歳11か月。男児。第１子。自閉症・発達性言語障害。独歩，生後11か月。初語，１歳６

か月。指差し，３歳０か月。２歳10か月の時に，Fセンターで自閉症と診断される。病歴は特になし。２歳10か月からP病院で，言語訓練を受ける。３歳から地域の私立幼稚園に通う。現在N小学校２年生，通常学級に在籍。Cは自閉症と診断されているが，指導の中で自閉症の基本症状が軽減し，現症から考えると自閉症スペクトルと発達性言語障害との境界に位置する事例と考えられる。診断的には，今後検討を要する子どもである。５歳６か月から主訴，ことばの遅れにて当センターにて発達支援を開始する。

２．分析の方法

対象児への発達支援の場面を，ＶＴＲに収めた。支援の方法は，遊びをベースにしたものである。遊びを通して，子どもの物と物との関係づけや，他者の物に対する態度への子どもの興味，物に対するシェマの多様性などに目をむけていく。遊びの中で子どもの興味や現在の能力をみて，言語獲得の基盤となる認知能力や表象機能の発達を促進することを考えている (小山2000)。本研究では，ＶＴＲに収めた３例への約1時間の発達支援の様子をもとに，言語，遊びに関して検討した。

特に本稿では，Aについては，５歳４か月27日のもの，Bに関しては，６歳３か月27日のもの，Cについては，７歳11か月29日の発達支援場面の分析結果をもとに初期言語獲得と遊びの発達について考察を加える。

分析方法については，ＶＴＲを再生し，子どもの発話とその遊びの状況を記録したものをもとに検討した。

なお，３例の発話分類にあたっては，２者で協議しながら行い，その一致率は，0.85であった。

(1)　言語発達について

言語についてはA，B，Cの発話を１語発話，２語発話，多語発話，くり返し，オウム返しの５つのカテゴリーに分類し，言語の発達状況を検討した。分類基準は表１に示す通りである。

表１　分類基準

１語発話	・自立語1語の発話 ・自立語+機能語(「行くよ」など) ・擬音語や擬態語(「ブッブッ」や「トコトコ」など)を含める
２語発話	・自立語2語の連鎖
多語発話	・自立語が3語以上の連鎖
くり返し	・同じ語・発話の2回以上のくり返し
オウム返し	・他者の発したことばを聞いて同じことばを即時的に使う語
・音声が不明瞭なため判別できないものは，不明瞭として数える ・感嘆語の「アッ」などは，1語に含めない ・ジャーゴンの中に有意味語が含まれているものに関しては，有意味語は一語発話に分類し，その前後のジャーゴンについてはそれぞれ不明瞭に数える ・○○自立語(例えば，「○○オネガイ」)といった場合は不明瞭１つと1語発話に分類する	

次に，語彙について，Nelson(1973)の分類を参考に，特定名詞，一般名詞，動作語，修飾語，個人－社会語，機能語，その他といったカテゴリーに分類し検討した。語彙の意味が発せられた状況から考えても分からない場合，「その他」に分類した。同じ語彙でも，語用的に考えて違う意味で使っている場合は，同じ語彙でも，それぞれを異なるカテゴリーに，２語発話，多語発話に含まれている新出

語彙はそれぞれのカテゴリーに分類した。

(2)遊びの分析

遊びについては，「感覚運動的遊び」「物の用途と合致した遊び」「象徴遊び」「構成的遊び」「療育者等への働きかけ」の５つに分類した。

Ⅲ．結果

1．言語発達の様相

(１)事例Ａ

Ａの発話の分類結果については表２に示す通りである。

Ａの発話は電話場面と療育者に対して遊びを要求する時に発話されたものが多かった。

全体的に独り言も多く観察された。「アッチヘイク，ジュンクーン」という独り言と思われる発話には，その場面にジュンクンという人物はいなかったが，自分の行為の現れのようにも思われた。そのように，独り言には，Ａ自身の行為の遂行が内的に処理されずに，外に出てきたものではないかと思った。

電話場面では，途中で若干，間があったもののおおよそ50秒くらい長いものと，短いものがあった。そして，母親などの身近な人の電話風景を見ているのか，ジャーゴンの中に含まれる有意味語は，まるで実際に相手と話しをしているかのようなことば使いであった。また，ジャーゴンにも抑揚があり，全体的にほんとうに会話をしているかのようであった。

「それなに？」「○○ありますか？」という療育者からの働きかけに，Ａが理解しているようで，それに応じたかかわり方をしていた。

療育者がジュースを飲むふりをして，コップにジュースがなくなった状態を何度も見せるということをしていたら，療育者が飲み終わる前にＡから「ゴチソーサーン」という発話がみられた。

Ａは，療育者にしてもらうダイナミックに体をまわしたり，飛ばしたりしてもらう遊びが好きで，はじめは体で要求を表現していたが，療育者が「もういっかい？」と聞くと，その後，自分から「もういっかい」といってことばで要求する姿がみられた。これがおおよそ，発話総数の約3分の1を占めている。

表２　Ａの発話数

１語発話	２語発話	多語発話	繰り返し	オウム返し	不明瞭	総　数
56	3	2	1	5	21	88
63.6%	3.4%	2.3%	1.1%	5.7%	23.9%	100%

Ａの語彙の内容については表３に示す通りである。

異なり語数は，35語であった。動作語が28.6％と最も多く，次いで個人－社会語が25.7％と多かった。それに続いて，修飾語，機能語共に17.1％で，特定名詞，その他が5.7％であった。一般名詞は0％であった。

表３　語彙の内容（Ａ）

カテゴリー		ことば	%
特定名詞	人	アンパンマン　ジュンクーン	5.7
	動物		
	物		
一般名詞	物・対象		0
	物質		
	動物・人間		
	文字・数字		
	抽象		
	代名詞		
動作語	要求・記述	オシマイ　モウイッカイ　イコ マッテヨ　ポイ　イッチャイカン ヤッテ　オネガイ　イマス　イク	28.6
	注意		
修飾語	属性		17.1
	状態	ナイ　オイチイ　ハイ	
	場所	アッチ　ココ　トコロ	
	所有		
個人－社会語		エート　コウ　ソッカ　モシモシ アノネ　ゴチソーサーン　アレ バイバイ　ハイ	25.7
機能語	疑問	ナンデナノカナァ　ナンデナノヨォ	17.1
	その他	ナ　ヨ　イ　ヘ	
その他		アナナ　ダママ	5.7

(２)事例Ｂ

Ｂの発話の分類結果は表４に示す通りである。

Ｂは，遊びの中で自分のしていることをことばにしたり，療育者とのやり取りの中でことばを発したりする姿が多くみられた。そして，療育者側からのことばをよく聞いて，模倣して発話する様子がよくみられた。

電話場面でのジャーゴンは，１0秒くらいであった。

発話全体で，「ブッブー」という語彙を多様に使っていた。語の機能からみると，注意，拒否，抗議といった，多様な語の機能で使っているのがわかった。また，Ｂ自身の感情も表しているような場面もみられた。その他にも，「ピンポン」「ザンネンデシタ」という発話も多かった。

遊びの中で，自分がやっていることに対して，療育者や母親に「上手？」と，聞く姿がみられた。喜びの感情を表現する「ヤッタァ」という発話が多く見られ，「ワァー」という驚きの感情を表現するといった，内的状態を表す発話もみられた。

表４　Ｂの発話数

１語発話	２語発話	多語発話	繰り返し	オウム返し	不明瞭	総　数
116	8	0	4	25	36	189
61.4%	4.2%	0%	2.1%	13.2%	19.0%	100%

Ｂの語彙内容については表５に示す通りでる。

異なり語数は，58語であった。そのうち，動作語，修飾語がもっとも多く，27.6％であった。修飾語の中では状態を表すものがもっとも多く，17.2％であった。次いで，個人－社会語が22.4％と多かった。あとは，一般名詞，機能語，特定名詞の順であった。特定名詞，一般名詞を合わせても15.5％と，個人－社会語に及ばなかった。

表５　語彙の内容（Ｂ）

カテゴリー		ことば	％
特定名詞	人	オカアサン　エンチョウセンセイ　ナオクン	5.2
	動物		
	物		
一般名詞	物・対象	ケーキ	10.3
	物質		
	動物・人間	ゾウサン　アカチャン	
	文字・数字	マル(マール)　イッコ	
	抽象		
	代名詞	アレ	
動作語	要求・記述	タスケテ　ナイテル　ヤンネー　イクヨ　マッテ トレタ　アケテ　イレテ　イク　アガリ　ブー ピンポン　ヤッタ　ピョン　イッタ　ナラス	27.6
	注意		
修飾語	属性	ジョウズ　カタイ　コワイ	27.6
	状態	ナーシ　ピッピッ　タッタッ　ダー マダ　ザンネン　ザンネンデシタ ダイジョウブ　ビックリ　ナナシ	
	場所	コッチ　ココ	
	所有		
個人－社会語		ハイ　イイヨ　ダイジョウブ　イヤ　ザンネンデシタ アリガトウ　アッ　バイバイ　オヤスミ　クダサイ イッテラッシャイ　ガンバッテ　モー	22.4
機能語	疑問	ナニ　ドコ	6.9
	その他	ダ　ヨ	
その他			0

(３)事例Ｃ

Ｃの発話の分類結果は表６に示す通りでる。

Ｃの発話は大変，明瞭で多く，療育者とのコミュニケーションもことばでおおよそとれていた。

電話場面では，おおよそ40秒ほど続き，その中で聞き取れる有意味語はとてもはっきりしており，あとは，早口で何をいっているのか聞き取れないものであった。

「イチゴチャーン」といって，物を擬人化して表現することが見られた。

ルール遊びである野球では，「ストライク」や「アウト」などの用語を使用していた。かくれんぼでも，日常生活の中での友だちとの遊びの中で獲得したのであろうか，「もういいかい」「マダダヨ」など決まっていることば使いでやりとりができていた。

「トコトコ」や「ジュー」など，自分の行為や物の状態を，擬音語や擬態語を使って表現する場面が多く見られた。

ケチャップを療育者や筆者に向かってかけてくる様子を，「チュー」と表現したものと，包丁をふりまわしながら「チャッチャッ」と表現する発話が多くみられた。

ダーツの点数では，指を指しながら「60点」「70」などと発話する様子がみられた。

自分のしていることを一人の療育者に「シー」と言ってことばと動作で表し，もう一方の療育者に内緒ということを伝える場面がみられた。

表 6　Cの発話数

1語発話	2語発話	多語発話	繰り返し	オウム返し	不明瞭	総　数
233	2	0	2	3	21	288
80.9%	10.1%	0%	0.7%	1.0%	7.3%	100%

Cの語彙の内容については表 7 に示す。

異なり語数は，111語であった。修飾語が最も多く34.3%であった。その中で状態を表すものが30.7%とおおよその割合を占めていた。次いで動作語が24.3%，一般名詞が22.5%，個人－社会語が10.8%，機能語が6.3%，特定名詞，その他が0.9%であった。

2．遊びの発達の様相

(1)事例A

Aの遊びの様相は表 8 に示す通りである。

Aは，感覚運動的な遊びが主であった。玩具を口に入れたり，投げたり，落としたりする動作的行為によって，物と関わる姿がみられた。しかし，その中で，お店屋さんの屋根をアイスのコーンでぶつけて，下から覗き込むような姿から，機能を無視したものではあるが，物と物とを関係づけながら，物の細部の探索も行っているようだった。また，動く電車を観察してから，その動く車輪の部分を顔に当てて感触を確かめながら，その物の探索的行為を行っていると思われた。ビデオに関しても同様，ボタンを触ったり，倒してみたりしながら，探索的行為をしていた。

物の用途と合致した遊びでは，以前から遊びの中で経験したのか，実際に病院で経験したことが反映されたのかの判断ははっきりしなかったが，聴診器を見つけると，自分の耳につける姿がみられた。療育者がやった後ではあったが，ジュースの出てくるボタンを押してジュースを出したり，出てくる所にコップを置くということもしていた。

象徴遊びでは，玩具のミニ掃除機を電話にみたてて，まるで本当に会話をしているかのように話す姿がみられた。その際，母親をちらちらと見ながら話す姿がみられた。また，ミニカップで飲むふりをしていた。

療育者等への働きかけでは，療育者にコインを渡したり，欲しがったりすることをことばではなく動作で表現する段階であった。体をグルグルしてもらうダイナミックな遊びでは，Aが「やって欲しい」という動作的サインを出した時に何度もタイミングよく「もういっかい？」ということばでAに聞きかえしたことで，途中からことばで表現できるようになった。

ミニポットをアンパンマンと命名し，A自身のイメージ場面もみられた。

療育者が展開する遊びをよく観察し，興味をもつと積極的に自分でもやってみる姿がみられた。しかし，離れた所から療育者が声かけしても，なかなかAの関心をこちらに向けさせるのは難しかった。Aが何かで遊んでいるすぐ側でAの視界に入る範囲の所で，こちらが展開する遊びに誘うのが効果的であった。

全体的に，遊びに興味を示すが，ずっと集中して遊ぶ様子ではなく，遊びに集中してきた頃かなと思うと，やめて部屋の中で常同行動といわれる反復的な動きをみせた。

遊びの間，家から持ってきた宝物入れのような缶ケースをずっと放さなかった。

表７　語彙の内容（C）

カテゴリー		ことば	%
特定名詞	人	イチゴチャーン	0.9
	動物		
	物		
一般名詞	物・対象	ベット　テレビ　バット　ヒキダシ ボール　ミカン　カワ　ハンバーガー　ケーキ プリン　ポテト　フライパン バスケット　デンキ　カクレンボ タマゴ　ケチャップ　スイッチ	22.5
	物質		
	動物・人間	センセイ	
	文字・数学	60点　65　70　12345678910	
	抽象	サッキ　ニオイ	
	代名詞		
動作語	要求・記述	シー　ソレ―(ソーレ)　ハヤク　アッタ ハイラナイ　ヤロー　イキマース イテ　タッテ　ウテル　カシテ イタチュ　チュー　イクヨ　ツカレタ　カエシテ コチョコチョ　アーンデ　イタダキ　モッテヨ キッテ　アライマス　ハイ　オイデ　ヤッテ デキタ　ショー	24.3
	注意		
修飾語	属性 状態	チョット　ダレ　ツギ アツッ　ダッ　プンプン　アウト ノー　ジョー　ストライク　ワァー　ボボボボ チャチャ（チャッ）　ジュー　パカッ　カタイゾ サイサイ　ポチッ　チン(チーン)　シュー　ポンッ カライ　モット　ニガイ　アリー ダイジョウブ　アレー　トコトコ ダメ　ヨシ　キューキュー　トォー　ンー ポイッ　イイカ　エイッ　ドン	34.3
	場所	ココ　コッチ	
	所有		
個人― 社会語		モシモシ　ジャネー　ヤダ ゴメンナサイ　ドウゾ　ホイ　コラー ケテー　ドウダ　オマタセ　アレッ　ハイハイ	10.8
機能語	疑問	ドコ　ダレ	6.3
	その他	ナ　ガ　ノ　ゾ　ハ	
その他		フェイントクライシス	0.9

表 8　Ａの遊びの様相

感覚運動的遊び	物の用途と合致した遊び	象徴遊び	構成的遊び	療育者等への働きかけ
・渡されたお皿にのったハンバーガーを下に落とす ・お店屋さんの台の上に物を置くと下に落とす ・お店屋さんの屋根をアイスのコーンでぶつけて様子をじっと見る ・レジのボタンを押しては引出しを開け，すぐに閉めるのをガチャガチャと繰り返す ・椅子に座っていたぬいぐるみを放り投げる ・走っている電車を取ると上から落とす ・動く電車の車輪を自分の顔にあてる ・ビデオのボタンをさわったり，コンセントを抜いたり，ビデオをたおそうとしたりする ・玩具のケチャップや鏡を口に入れる ・机においてあるおもちゃをくちゃくちゃにする	・聴診器を耳につける ・玩具のジュースの出てくるボタンを押してジュースを出す ・コップをジュースが出てくる下に置く ・玩具のレジのボタンを押して，引き出しを開ける	・玩具のミニ掃除機を電話にみたてる ・玩具の電話で誰かとお話をしているかのように話す ・ミニカップで飲むふりをする		・玩具のレジからお金のコインを出して渡すと，その様子を見ようとし，またほしがる ・療育者にレジからお金を出して渡す ・療育者がどこかに行こうとしたり，違うことをしていると，服を引っ張ったり発声で意思をつたえようとする ・体をグルグルしてもらいたくて，療育者の所に行って負ぶわれる姿勢をとったり，足をあげたりと体で表現したり，ことばで伝えたりする

(２)事例Ｂ

Ｂの遊びの様相は表９に示す通りである。

Ｂは，感覚運動的遊びは少なく，物の用途と合致した遊びや，象徴遊びが多くみられた。ひとつの遊びに集中する時間はある程度長く，ひとつひとつの遊びを十分楽しんでから他の遊びに移るような感じであった。ミッキーが飛び出してくるキャンディパニックでは，両手を挙げて驚く様子を体で表現する姿がみられた。

感覚運動的遊びでは，音を鳴らしてその音を楽しもうとする姿がみられた。

物の用途と合致した遊びでは，体温計を脇にはさんだり，電話に出る際に，ボタンを押してから話しはじめ，終わったら元に戻しておくなどの，日常生活でよく見られる行為が遊びに反映されているように思われた。アイスクリームはアイスクリームスコップで取ることや，ハンバーガーをオーブンに入れて温めること，お金はレジに入れる，クレーンゲームでおもちゃを取る，コインを入れるとゲームが動く，魚を釣るには，口が開いている時に口の中に釣り紐を入れて，引き上げて釣るという，物の社会的使用がなされていた。

象徴遊びでは，小さい人形を用いて，それを行為主として，それ自身が動いているように操作していた。また，人形を動かし車に乗ったり，シーソーに乗ったり，鉄塔に登らせたりと，人形がする行為のその受け手として別のものを関連させていた。

ごっこ遊びもみられた。療育者が医者で，その受け手としてＢが患者になり，体温を測ってもらっ

表９　Ｂの遊びの様相

感覚運動的遊び	物の用途と合致した遊び	象徴遊び	構成的遊び	療育者等への働きかけ
・音の鳴るぞうのぬいぐるみを鳴らそうとする ・魚釣りゲームの音楽を鳴らす	・玩具のアイスクリームをアイスクリームスコップで取る ・玩具の体温計をわきにはさむ ・電話をとるとボタンをおしてから話し始める ・玩具の電話を元の所に戻す ・車を手で走らせる ・ハンバーガーをオーブンに入れる ・お金をもらい，レジに入れる ・クレーンゲームでおもちゃを取る ・コインをもらうとクレーンゲームのコイン入れに入れる ・魚釣りゲームで竿の先についている玉を魚の口に入れて口をおさえながら釣り上げる	・療育者が医者，Ｂが患者さんとしてお医者さんごっこをする ・ぬいぐるみを患者さんとしてお医者さんごっこをする ・人形を動かして人形同士で遊ぶように動かす ・人形を車に乗せて家に帰っていくように動かす ・人形が家に入る時，ドアを開けて入ろうとする ・人形の家に誰かが来たのを出迎える ・人形をシーソーにのせて動かす ・人形を滑り台に滑らせる ・人形を電車に乗せて走らせる ・療育者の作った鉄塔に人形を登らせる	・プラレールのレールを探してつなぐ ・いろいろ試して合うレールを探す ・家の中に置くイスを探しに行く ・ブロックをつなぎ合わせて何かを作る	・自分がコーヒーカップで楽しんだ後，交代してぬいぐるみをイスに乗せてあげる ・遊んでいる人形たちの所に行って，自分の持っている人形も仲間にいれてもらおうと働きかける ・自分がブロックで作ったものを療育者に命名してもらおうとする ・壊れてしまったブロック鉄塔を直すように療育者に働きかける

り，注射をしてもらったりしていた。その後，療育者がぬいぐるみを動かし患者さんになり，Ｂがお医者さんになり，役割を交代してごっこ遊びをした。療育者がＢに働きかけ，Ｂは療育者のイメージを共有しながらごっこ遊びを楽しんでいた。ゾウが泣いて逃げる場面を療育者が作ると，それに対して，抗議としての「ブッブー」という発話もみられ，Ｂなりの遊びのイメージがしっかりと形成できていることが伺われた。

構成的遊びでは，合うレールを探したり，つないだり，ブロックを組み立てて何かを作るという，遊びに計画性がみられた。

療育者等への働きかけでは，自分が組み立てたブロックを命名してもらおうとしたり，壊れた鉄塔を直してもらおうと要求する姿がみられた。自分がコーヒーカップで楽しんだ後，交代してぬいぐるみを乗せるという行為で，ぬいぐるみがまわる様子を見ながら楽しむ姿がみられた。療育者が動かしている人形の所に，仲間に入れてくれるように働きかけていく姿もみられた。しかし，Ｂ自身がそうする前に，療育者がＢに対してそのように働きかけていたことから引き起こされた行為と思われる。

(３)事例Ｃ

Ｃの遊びの様相は表10に示す通りである。

Ｃの遊びは，野球，おままごと，ケチャプやコショウを療育者たちにかけるふりをする遊び，かくれんぼが主で，一つずつの遊びに集中する時間が長かった。また，Ｃ自身が遊びに主導権をもって，動いているように思われた。

感覚運動的遊びは，ぬいぐるみを投げたり，ぬいぐるみの中に飛び込むという姿がみられた。

物の用途と合致した遊びでは，電話を耳にあてて話す，野菜を冷蔵庫に入れる姿がみられた。また，

表10　Cの遊びの様相

感覚運動的遊び	物の用途と合致した遊び	象徴遊び	構成的遊び	療育者等への働きかけ
・ぬいぐるみの中に飛び込む ・ぬいぐるみを投げる	・玩具の電話を耳にあて話す ・ボールを投げる ・バットを振る ・玩具の野菜を玩具の冷蔵庫に入れる	・電話で相手と会話しているように話す ・玩具のミニトイレのふたを開けたり閉めたりしながら，トイレの中に落ちるイメージをしながら発声する ・ボールがあたった鼻に療育者が薬を塗ると，そのイメージを共有して発声する ・玩具の果物を擬人化して扱う ・玩具の食べ物にケチャップやからしをたくさんつけるふりをする ・辛い食べ物を食べるふりをして，その辛さにとびあがるふりをする ・玉ねぎを切って目がしみるふりをする ・スイッチをまわして火をつけ，フライパンをふりながら野菜を焼くふりをする ・水道の所で，野菜を洗うふりをする。 ・火の所に手があたり，熱いふりをする	・家の中に置くキッチンを探しに行って，どこに置こうか試しながら考える ・ミニフードの卵の殻が片方しかなく，もう片方を探す	・的当てゲームを療育者にやるように促す ・ケチャップやコショウを療育者に向けてかける ・包丁で，療育者を刺す ・玩具を療育者に向かって投げる ・ボールをもって野球をやろうと誘う ・ピッチャーを交代するように要求する ・辛くした食べ物を療育者に渡して食べるように促す ・遊び(かくれんぼ)をしようと，提案する

野球では，ピッチャー，バッター，キャッチャーという，それぞれの役割があり，ボールを投げたり，バットを振ったりして，野球を楽しむ姿がみられた。その中で，ボールの投げ方を変えたり，バットを右で振ったり，左にもちかえて振るなど，野球をする中でも，様々な方法で変化をつけながら楽しんでいた。

象徴遊びでは，おままごと遊びの場面で，自分で食べるふりなど自己に向けたふりや，療育者に食べさせるなど他者に向けたふりがみられた。また，玉ねぎを切って目にしみて痛がるふり，野菜を洗うふり，フライパンで野菜を焼くふり，火の所に手が当たって熱いふりをするなど，現実経験の再現か，何かで得た知識の再現と思われるような，場面もいくつかみられた。玩具のミニトイレをつかって，その中に落ちていくイメージの中での発声もみられた。また，療育者から働きかけたお薬を塗るという場面では，療育者とイメージを共有している様子がみられた。

構成的遊びでは，家の中に置くキッチンを探しに行く，卵の殻の片方を探しに行くなど，遊びに計画性がみられた。

療育者等への働きかけでは，自分の要求，遊びへの誘いなどを行動とことばで表現することができていた。コショウやケチャップを療育者にかけてきたり，包丁で療育者を刺してくるなど，療育者との関係を楽しみながら，またこちらの反応を見て楽しんでいた。

Ⅳ．考察

1．言語と遊びの発達

対象とした３人の子どもたちは，「自閉症」と診断された子どもたちであるが，それぞれの気質や認知スタイルを持ち，異なる養育環境の中で育ってきており，その点が大いに彼らの言語発達の様相に影響を与えていると考えられる。

ここでは言語と遊びの発達との関連性について探っていく。

Aの遊びの様相は，感覚運動的遊びが多い。しかし，基本的信頼をもつ療育者などとの関わりの中で，模倣や観察学習を通して，小山（2000）のいう「人に共通する行為や経験」について学習し，実際に自分でもやってみるといった段階と考えられた。遊びをしているときで，療育者を気にとめず自分の世界の中で遊びを展開しているときは，特にひとり言が多く，自分の行動をことばによって表現し，思考を働かせていると考えられる。しかし，これはまだ，自分の考えていることを内言として，自分の中で処理できずに外にことばがでてきている状態と考えられる。

電話場面では，長いジャーゴンがみられたが，その中に有意味語が含まれており，実際に会話をしているような感じで話す姿がみられた。また，この時，母親をちらちらと見て話していたことから，母親と電話のやりとりをしているつもりであったのだろうと考えられた。この電話場面でのジャーゴンに含まれた有意味語は，Aが日常生活の中で，大人が使っていることばを取り入れて使ったと思われた。他者のことばを自分でも使ってみようとする姿がみられ，Aの他者への認識が育ってきていると考えられた。感覚的遊びを通して，様々な物への認知が発達してくる中で，物と合致した遊びも少しずつ増えてきていると考えられる。何回も，ジュースの出てくるボタンを押してジュースを出すうちに，その下にコップを置けばその中にジュースが入ることが分かってくるのであろう。また，基本的信頼をもつ療育者に身体遊びやゆさぶり遊びをしてもらうなど，療育者とのコミュニケーションの中で，自分の欲求を行為で表現するだけでなく，ことばで表現するようになってきていると考えられる。

まだこの段階では，発話は聞き取りにくいものであったり，不明瞭なものが多いが，それは，まだ獲得語彙数も少なくすべてをことばで表現できないためと考えられる。フレーズとしてことばを獲得しているものがあり，そのため，語彙カテゴリーの中での機能語が語彙数に比較して多いように思われた。

Bの遊びの様相は，感覚運動的遊びが減り，物の用途と合致した遊びや，象徴遊びが多く，構成的遊びも増えつつある段階である。物の用途と合致した遊びは，Bの身の回りにある物について，日常生活の中における遊びや実生活で学習されていると考えられる。また，療育者が働きかけるごっこ遊びを受け入れ，療育者のイメージを共有し，自分の役割を果たすことができることから，Bの自己認知，他者認知ができてきていることがわかる。他者認知ができてくると，人に共通する行為やことばに対する感受性が高まってくると考えられる。プラレールのレールや，家の中に置く椅子を探したりするといった遊びに計画性がみられるようになると，健常児では多語発話の出現がみられるという指標が出されている(McCune‐Nicolich, L., 1982)。しかし，Bでは言語は増加しているが，健常児で指標されているような言語発達が遊びと対応しているとは思われず，遊びの発達が先行していると考えられる。

しかし，キャンディパニックなどで，驚く様子や，喜ぶ様子を，両手をあげて表現するとともに，それを表現するような発話がみられたことから，内的状態を表す動作やことばが理解できるようになっており，また，それが結びついてきていることが分かる。発話数の中で，「ブッブー」や「ピンポーン」「ザンネンデシタ」といった発話が多くみられたが，「ブッブー」は，多様な意味で用いられるなど，発話は増加しているが，まだことばですべてを表現できないため，知っている語彙を用いて表現

していると考えられた。この背景には，Bのことばを通して他者と関わりたいという気持ちが育ってきているように思われた。いろいろな遊びに興味を示すが，１つの遊びに集中する時間はある程度長く，自発的な遊びの中で，自分のイメージをもって遊ぶことができるようになってきていることが分かる。人形を用いた象徴遊びが多く，また人形と人形を関係づけた遊びや，人形と自動車といった物の玩具を関係づけた遊びが大いにみられた。また，療育者が人形や玩具を操作する様子を見て，それに応じて自分の人形を動かしたりする姿がみられた。これは，他者の表象的・象徴的働きかけが受けとめられるようになり，イメージの共有ができてきていることが分かる。また，人形を自分の行為の受け手として扱うこと(受動的他者)が多かったが，人形自らが行為しているように扱うこと(能動的他者)に変化してていることからも，イメージの発達がうかがわれる。ブロックでの構成的遊びでは，療育者に作った物を命名してもらうなど，命名への意識が高まり，命名ゲームを楽しむようになると考えられる。

Cの遊びの様相は，象徴遊びでも自己に向けたふり，他者に向けたふりなどふり遊びが多くみられ，それとともに擬音語や擬態語が多く発声され，また，物の名称が多くみられた。これは，ふり遊びを楽しむ中で，音声的な表現が多様化され，様々な状態を叙述できるようになってきており，また物への志向性も高まっているからと考えられた。

興味をもつ遊びは限られていて，おままごと以外では，パワフルな遊びを好み，療育者との関わりの中で，療育者に対して，包丁できりつけてきたり，ケチャップをかけるなど，その行為を擬音語で表現して関わってくる姿がみられた。Cの個人内における遂行を音声で表現して行っていると考えられた。また，それによる療育者等の反応をみて楽しむことから，Cの他者認識が発達してきていると考えられる。

また，学校などでやっていると思われる，野球やかくれんぼなどのルール遊びを，自分が主体となってやりたがった。かくれんぼでは，ルールとして数をかぞえたり，「もういいかい」「まだだよ」などの掛け声の使い方も理解できていた。療育者等と，役割を交代して遊びをより発展的に楽しむ姿も，野球でもかくれんぼでもみられた。そうした，遊びは，学校の生活の中での友だちとの関係の中で獲得していったものだろうと考えられる。また，他者の意図がよりとらえられるようになってきていることの表れであり，それは日常生活の中でことばを通して他者との関係の中で遊びが広がってきていることからも伺える。

Ｃは自閉症と２歳10か月の時に診断されている。しかし，発達の経過の中で自閉症の症状は軽減し，ことばの遅れの問題が顕在化してきた。現在は，自閉症スペクトラムの範囲に入ると考えられるが，発達性言語障害との鑑別については今後の課題であるといえる。いずれにしてもＣの事例から表象の共有，表象の発達とともに，言語発達がみられてくるといえる。

以上の様なことから，１語発話期から２語発話期において，遊びが感覚運動的な遊びから物の用途と合致した遊び，象徴遊びなど変化していく。それとともに子どもの中の世界が広がり，ひとり言やジャーゴンが見られるようになる。そして，基本的信頼関係をもつ人とのコミュニケーションの中で，自分の欲求が満たされることや，意思が伝わることを経験していく中で，他者認識が発達していくとともに，自分の意図する事をことばで伝えようとする。ひとり言やジャーゴンは，ことばを獲得していく中で徐々に減っていき，発話も明瞭化していく。また，ことばの獲得は思考を発達させ，他者のイメージを理解できるようになり，それとともに自分のイメージをもって他者に働きかけるようになる。また，足りない玩具を探したりするなどの遊びに計画性がでてきたり，ブロックなどを組み立てたりする構成的遊びも見られるようになる。このように，遊びが広がり高次化していくとともに，他者認知が発達し，言語が発達していく。

２．語彙獲得の方向性

Brown (1973) は，平均発話長（ＭＬＵ）を用い，子どもの語と語を結び付け，より複雑な発話を算出する増加しつつある能力を評価した。それによると，対象児Ａ，Ｂ，Ｃは3人とも段階Ｉに相当することが分かった。語彙数を見ると，Ａが35語，Ｂが58語，Ｃが111語と発話数に比例して，語彙数も多くなっていた。一方，発話数に占める不明瞭発話の割合が，語彙数が増えるにつれ，Ａが23.9％，Ｂが19.0％，Ｃが7.3％と減少していることが分かった。語彙カテゴリーから見ると，Ａは動作語，個人－社会語の割合が多く，物の名称の割合が少ないが，Ｂになると，物の名称の割合も少し増えてきて，Ｃになると物の名称の割合が随分増えてきた。このことより，Brownのいう段階Ⅱに移行するころには，不明瞭発話は減少し，物の名称が増加してくることが予想された。
Ａ，Ｂ，Ｃと順に２語発話が増えているが，その背景として語彙カテゴリーから，物の名称の増大，状態を表す修飾語の増大が顕著にみられた。また，対話的関係がもてるようになってきていることも明らかであった。このことより，２語発話が出現する際のことばの発達には，物の名称の獲得，状態を表す修飾語の獲得が関係してくると予想された。これらの発達には，特に子どもの他者へのコミュニケーション意欲や表現欲求が高まっていることが背景にあると考えられる。子どもの外界認知が広がり，要求内容や身のまわりの大人の行為についての理解がそれまでよりもいっそう深まるなかで，より複雑なことばによる表現形式が獲得されていく。２語発話は子どものそのような発達を背景に出現してくるものであるといえる (小山2000)。

初期の言語発達には獲得スタイルがあるという。Nelson(1973)は，初期の言語発達において２つのはっきりとしたスタイルを特定している。それらは，子どもの初期50語において，かなりの比率を物の名称が占める「リファレンシャル・スタイル(指示型)」と，物の名称は少ないが，動作語や人びとの名前といった語をより多く持つ「イクスプレッシブ・スタイル(表現型)」と呼ばれるものの２つのスタイルが見られると指摘した。この語彙発達スタイルという観点から見ると，Ａは50語には達していないものの，典型的なイクスプレッシブ・スタイルであるといえる。Ｂは，イクスプレッシブ・スタイルであるが，物の名称が次第に増えてきているとえる。

自閉症の子どものこの段階における特徴は，健常児が物の名称を早い時期から獲得するリファレンシャル・スタイルをとるのに対し，動作語や人々の名前といった語をより多く獲得するイクスプレッシブ・スタイルをとる。そこには，語彙獲得に関わる認知機能の特徴が健常児と自閉症児では異なっていて，それが，語彙獲得におけるスタイルに大きく影響しているのではないかと考えた。

３．今後の支援への示唆

子どもの発達をより豊かなものにしていくためにも，早い時期からの適切な発達支援はとても意義のあるものであるといえる。そして，長い目で子どもたちを見守り，支援していくことが筆者自身，必要であると感じることができた。そして，発達支援における親への適切な助言や，親の不安や心配事に答えていくことが，子どもの発達をより豊かにしていくために必要不可欠である。

発達指導は，遊びをベースとして，子どもの興味・関心を引き出していくことで，子どものより主体的な活動を増やし遊びを広げ，その中で子どもの物への認知や，他者認知の発達を考えていかなければいけない。子どもとの基本的信頼関係を基盤に，子どもが安心して他者と関われるような環境を作り，他者を通していろいろな物への志向性を高めていく。そうしたことが，子どものことばの発達を考えていく上で重要なことである。

対象とした自閉症児３例に関しても，現在，療育者との信頼関係の中で，遊びが広がっていき，１語発話から多語発話へとことばが広がってきているといえる。それぞれの子どもの発達段階は異なるものの，遊びの中で，他者認知や象徴機能が発達していき，ことばを獲得していっているといえる。従って，それぞれ子どもの発達の様相を理解した上で支援していくことが，子どもの他者認知や象徴

機能を発達させることにつながり，ことばを獲得していく上で必要不可欠なことといえる。また，原叙述的な行動の発達も考えていかなければならない。

Aは，感覚運動的遊びが多いが，療育者などの関わりの中で，徐々に他者への認識が育ってきているといえる。また，身体遊びを好み，療育者に要求する姿がみられる。そうしたことからも，Aの要求を十分に満たして，療育者と関わる中で，他者との関わりを多くもっていくことが必要であるといえる。Bは，遊びが広がってきており，集中力も伸びてきている。また，遊びの中で療育者とのイメージの共有を積極的に楽しむ。Cも，ルール遊びや，療育者へのからかいのような行為によって療育者の反応を楽しむといった姿がみられる。そのような子どもの気持ちを十分に受け止め，さらに遊びを発展させていくとともに，他者認知や象徴機能を発達させていくとともに，ことばの獲得を図っていく。

最後に，本研究にご協力いただいたA，B，Cの子どもたちとご家族の皆様に心より感謝いたします。今後，本研究が子どもへの言語発達支援の際に，少しでも役立つものであることを望みつつ，稿を終えたい。

文献

Baron-Cohen, S., Leslie, A.M., & Frith, U. 1985 Does the autistic child have a 'theory of mind'? Cognition, 21, 37-46.

Brown-Cohen, S. Mindblindness ; An Essay on Autism and Theory of Mind. MIT Press.

Brown, R. 1973　A First Language: The early stages. Harvard.

Curcio, F. 1978 Sensorimotor functioning and communication in mute autistic children. Journal of Autism and Childfood Schizophrenia, 8, 281-292.

Kanner, L. 1943 Autistic disturbances of affective contact. Nevous Child, 2, 217-250.

カナー，L. 1995 幼児自閉症の研究　十亀史郎他訳　黎明書房

小山 正編 2000 ことばが育つ条件－言語獲得期にある子どもの発達　培風館

McCune-Nicolich, L. 1982 Play as prelinguistic behavior : Theory,evidence and applications. InMcClowry, D. P., Guilford, A. M. & Richardson, S. O. (eds.), Infant Communication : Development, Assessment and Intervention. Grune & Stratton.

Nelson, K. 1973 Structure and strategy in learning to talk. Monographs of the Society for Research in Child Development, 38, No.149

小椋たみ子　1999　初期言語発達と認知発達の関係　風間書房

小澤　勲　1984　自閉症とは何か　精神医療委員会

Rutter, M. 1968 Concepts of autism : A review of research. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 9, 1-25.

Tager-Flusberg, H. 1999 Language development in atypical children. Barrett, M. (ed.) The Development of Language. Chapter 12, Psychology Press.

山上雅子　1999　自閉症児の初期発達－発達臨床的理解と援助－　ミネルヴァ書房

Wing, L.　1996　The Autistic Spectrum A guide for parents and professionals Constable and Company Limited, London　久保紘章他監訳　1998　自閉症スペクトル－親と専門家のためのガイドブック－　東京書籍